

# バス運転手は代替できるのか

● 放眼日中 ●

台湾で田舎の国道を歩いていた時の事。突然、自分の体のすぐ脇を大型バスがかすめるように通り過ぎたのには驚いた。そんなに狭い道でもなく、そんなに混んでいるわけでもない道でなぜなのか。しかも、スピードを相当に出しており、こちらが少しでも動けば、確実にはね飛ばされていただろう。

確かに歩道と車道の区別が明確ではないので、一概にバスがすべて悪いとも言えないが、なぜこんなことが起こるのだろうか。それは「危険な追い越し」であった。前の車が少しでも遅いと、スピードを上げて追い越していくのだが、まさか大型バスがそれをするとは想定外。日本なら、運転手の資質が確実に問われるだろう。

先日は中部の霧社に近い、廬山温泉に行ってみた。ここは日本統治時代に開拓された温泉があるのだが、

最近の洪水や地震により危険が高まり、かなりの温泉が閉鎖され、昔の賑やかさは残念ながらもなくなっていた。

そんな所へバスで行ったのだが、バスの運転手に帰りのバス時間を確認すると「表示されているから看板を見ろ」と実に素っ気なく言われてしまう。

そして2時間後、時刻表に載っている来るはずのバスをずっと待っていたが、ついに来なかった。どうやらわれわれの待つバス停には寄らず、通過してしまっただけらしい。幸い50分後に次にバスがあったからよかったが、あんな山の中で取り残されでもすれば何とも恐ろしい。危うくヒッチハイクする羽目になるところだった。

日本では今、ある種の「台湾ブーム」が起きていると思う。その理由の一つに「台湾人は親日的で優しい」



コラムニスト・アジアソウオッチャー 須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

というのが必ず付いてくる。確かに筆者も数え切れないぐらいの親切を受け、感謝に堪えないのだが、その一方で、残念ながら「不親切」「不適切」な対応を受けることもままあることは事実だ。もちろん、日本の地方都市でも「ここで降ろしてほしい」と伝えていたにもかかわらず通り過ぎられた、などの経験はあるので、台湾だけを責めることはできないが。

田舎では労働力が不足していることもあり、農業や土木作業などの低賃金・重労働な仕事は既にベトナムやインドネシアなどの外国人労働者に肩代わりされていると言ってもよい。

だが、バス運転手のように外国人労働者による代替が利かない業種では、高齢化が進み競争原理も働かず、昔のままのサービスで現在の一般状況からかけ離れてしまっている

例も散見される。外国人労働者がその国の大型自動車免許を取得して、バスの運転手になるとはあまり聞いたことがない。発展途上の国では、運転ができればそれは一つの技術であり、出稼ぎする必要はないのだろうし、わざわざ他国の言語を覚えろ一カルバスの運転手を務めるといのは、極めて特殊な例に該当するだろう。

昨今は何の業種でも人工知能(AI)の導入が叫ばれているが、バスの運転手は代替可能業種に当てはまるのだろうか。もしそうであれば、台湾のバスサービス向上はAI時代を待たなければならぬということか。

しかし、交通ルールが守られ、土砂崩れなどの危険もない平地の都市部とは違い、果たして無人バスは山道を走ることができるのか。ちよつと想像できない自分がある。